

聖書:士師記1章16～36節

説教:エブス人は追い払わなかった

はじめに

続けて士師記を見てまいります。モーセの後を継いでリーダーとなったヨシュアは、四十年間の荒野の旅を終えて神の約束の地であるカナンの中に入り、十二の部族ごとにそれぞれが住むべき土地を割り当てます。しかし、それは地図の上に線を引いただけの話であって、すぐに自分たちのものになったわけではありません。そこにはすでにカナン人を中心とするいろいろな民族が住んでいて、主からは「彼らを追い払いなさい」と命じられていました。ではだれが先頭に立って戦うのか。まさにそのことを考えようとしていた矢先に、ヨシュアは後継者を指名することなく死んでいきます。そこで、イスラエルの民は「だれが先頭に立って戦うのか」を主に尋ねたところ、「ユダ族が上っていくべきである」と言われ、ユダとその兄弟シメオンが主のことばに従ってカナン人と戦っていった。それが前回までのあらすじです。

今の私たちがここを読むときに真っ先に浮かんでくるのは、「どうして神は戦争をさせるのだろうか。」という疑問でしょう。聖書の神は平和の神ではなかったのか。それなのに、なぜ彼らはカナン人と闘わなければならなかったのか。このことが今の私たちとどのような関係があるのか。そのことをともに見てまいります。

1 なぜ闘わなければならなかったのか

1) ヨシュアの問いかけ

そもそもなぜ彼らがカナン人と闘わなければならなかったのか。そのことを正しくおさえておく必要があります。そうでないと、「神は戦争が好きなのだ」のか、「人権という考えがまだなかった頃の時代遅れの話」という誤解で終わってしまいます。もちろんそんなはずはない。ではどう考えたらよいのか。

そのヒントは、ヨシュアが語った遺言として語った次のことばにあるように思います。ヨシュア記24章14、15節です。「今、あなたがたは主に恐れ、誠実と真実をもって主に仕え、あなたがたの先祖たちが、あの大河の向こうやエジプトで仕えた神々を取り除き、主に仕えなさい。主に仕えることが不満なら、あの大河の向こうにいた、あなたがたの先祖が仕えた神々でも、今あなたがたが住んでいる地のアモリ人の神々でも、あなたがた

が仕えようと思うものを、今日選ぶがよい。ただし、私と私の家は主に仕える。」

あなたがたは主に仕えるのか、それともほかの神々に仕えるのか。どちらに仕えるのかを自分で選びなさい、とヨシュアは問いかけました。

2) 民たちの告白 (ヨシュア記24章16, 18節)

これを聞いた民たちは次のように応えます。「私たちが主を捨てて、ほかの神々に仕えるなど、絶対にあり得ないことです。」「私たちがまた、主に仕えます。このお方が私たちの神だからです。」

彼らは、四十年間の荒野の旅してきた世代です。旅の間、いろいろな危険があり、戦争もあった。でも、そのとき神がどのようにして自分たちを守ってくださり救ってくださったのか、彼らは頭の知識ではなくて、身体で体験してきた。そのような体験に裏付けられた確信があるので、迷うことなくすぐに心から主に仕えますと告白します。

3) 誘惑と世代交代

では、実際はどうだったのでしょうか。ここで約束したとおりに彼らは主にだけ仕えていったのでしょうか。結論から先に言えば、できませんでした。失敗します。直接の原因は、イスラエルがカナン人を追い払えなかったことにありますが、その他に二つの理由がありました。

一つ目は、カナン人が信じていた異教の神々の誘惑です。その誘惑が非常に強力であったこと。それが大きな理由です。でもそれだけなら、まだなんとかなったかもしれない。そこにもう一つの事情が重なってきます。2章10節後半、11節に出てきます。「そして彼らの後に、主を知らず、主がイスラエルのために行われたわざも知らない、別の世代が起こった。すると、イスラエルの子らは主の目に悪であることを行い、もろもろのバアルに仕えた。」荒野を経験した世代はなんとか持ちこたえたのですが、次の世代は直接には神の臨在を経験していない。それで簡単に誘惑され、主を捨ててほかの神々走って行った。これが二つ目の理由になります。

イスラエルが、約束の地からカナン人を追い払わなければならぬと命じられたのはそのためです。もしそうしなかったなら、あなたがたは簡単に主を捨てて悪の道に進んでしまうから。そのこ

とを神はご存じだったので、あらかじめ警告していたのです。

それでイスラエルはこの後どうなったのでしょうか。

2 失敗の歴史

1) 追い払わなかった

今日の箇所を読んで、なじみのない土地の名前や民族の名前が続きますから、どこに恵みがあるのかと思ったかもしれません。そんなときは細かいことにはこだわらず、鳥のような視線で少し離れたところから観察してみるとよいと思います。そうすると二つの特徴が見えていきます。

一つ目。同じフレーズが繰り返されていることです。例えば19節。「ユダは彼らを追い払えなかった。」21節。「エルサレムに住んでいるエブス人に関しては、ベニヤミン族がこれを追い払わなかったので、エブス人は今日までベニヤミン族とともにエルサレムに住んでいる。」27節。「占領しなかった。」28節。「追い払うことをしなかった。」他にもまだ続くのですがこれくらいにしておきましょう。少しことばが違ってはいますが、元のことばはすべて同じことばです。ここでは九回も繰り返している。これだけ繰り返されていたら、これは何かあると思った方がよい。

2) カレブだけが

二つ目の特徴。他の部族がことごとく「追い払うことはしなかった」と書かれて、主の命令に失敗しているのに、ただ一人だけ追い払った人がいた。20節に出て来るカレブです。「モーセが約束したとおり、ヘブロンはカレブに与えられ、カレブはそこからアナクの三人の息子を追い払った。」

カレブだけができたと書かれているので、他の部族が追い払えなかったという事実が浮き上がるようになっていく。

ついで言うと、ここにある「モーセが約束したとおり」というのは、民数記14章24節で神がモーセに語った約束を指しています。十二人の偵察隊がカナンの地を調べてきて戻って来たときのことで、偵察隊のうちの十人は、カナンの地には恐ろしい人たちが住んでいるのであそこに行ったら殺されるからエジプトに帰ろうと強く主張したのに対し、カレブとヨシュアの二人だけが、「いや絶対にそんなことはない。私たちカナンの地に進まなければならない。」そう言って、いのちをかけて主に従い通した。それで神はモーセに次のように語ります。「わたしのしもべカレブは、ほかの者と

は違った霊を持ち、わたしに従い通したので、わたしは、彼が行って来た地に彼を導き入れる。彼の子孫はその地を所有するようになる。」

あの事件から四十数年を経て、かつて神が語られた約束が果たされていきました。

3 罪にまみれながらも

1) 私たちの現実

さてではこの士師記に書かれていることは、今の私たちとどのように関係があるのでしょうか。次にそのことを考えます。

私たちは生まれてこの方ずっとこの世界で生きてきましたから、これが当たり前だどこかで思っています。しかし神の目からは、この世は罪に満ちている異常な世界に見えています。パウロはこのことについてエペソ書6章12節でこう語っています。「私たちの格闘は血肉（けつにく）に対するものではなく、支配、力、この暗闇の世界の支配者たち、また天上にいるもろもろの悪霊に対するものです。」

肉の目には平和に見えるこの世界であっても、霊的な目で見るとあらゆるものが私たちに挑みかかってきて、信仰を奪おうとし、ほかの神々を信じるように誘惑してきます。それでも、私たちはこの世界から他の安全なところに逃れる訳にはいかない。否が応でもここで生きていかなければなりません。イスラエルの民も同じでした。たとえ神の約束の地であっても、異教の神々という誘惑に満ちた土地で、戦いながら信仰を守らなければならなかった。いま見てきたとおり、イスラエルはその戦いに負けてしまいます。

では私たちはどうすべきなのでしょう。イスラエルのように失敗してはいけない。がんばって信仰を守り通しなさいということでしょうか。いつも言いますが、がんばってできるのなら苦労しません。神は私たちがいかに弱い者であるかをよくご存じなのです。「主にだけ仕えます」と威勢よく誓ったイスラエルがやがて失敗していくことを最初から見越している。それでも、神は着々と救いの準備を前に進めていきます。

2) エブス人はエルサレムに住んでいる

どこにそそんなことが書かれているのでしょうか。意外に思うかもしれませんが、21節がそれです。「エルサレムに住んでいるエブス人に関しては、ベニヤミン族がこれを追い払わなかったので、エブス人は今日までベニヤミン族とともにエルサレムに住んでいる。」

イスラエルが弱かったために、エブス人をエルサレムから追い払うことができなかった。これは言ってみれば、イスラエルの恥の歴史です。でも聖書はそのこともごまかさないで書く。そのわけは何でしょうか。

士師記の時代からおおよそ数百年を経て、イスラエルの王となったダビデはあるとき神から祭壇を築くように言われます。王ですから、自分が持っている土地に祭壇を築くはずで、ところがダビデはエルサレムに住んでいたエブス人アラウナの所にわざわざ出向いて代金を払い、そこに祭壇を築きました。やがて彼の息子ソロモンの時代になったとき、そのところに神殿を建てていく。その神殿にやがてイエス・キリストが入られる。エブス人がエルサレムに住んでいた、そのことが意外なところで後に神の救いにつながっていくのです。神は罪によって私たちにできなくなっていることを恵みに変える方であることがここからも読み取ることができます。

私たちも、家族の中で親戚の中で、職場や学校で信仰を守り通すことの難しさを覚えるときがあると思います。クリスチャンであることを隠したり、なんとなく言いそびれてしまったり。もっと証ししなければと思ってもできなくてがっかりするかも知れない。そんなとき、信仰が弱いからと自分を責める必要はありません。もともとこの世界は私たちに敵対しているですから、大変なのはあたりまえ。

主イエスがこの世に人となって来てくださったとき、どうしたのですか。私たちと同じように弱くなられたのです。だったら当然私たちの大変さをよく知っている。その方が私たちの友となられ、私たちとともに歩んでくださる。その主に弱い自分であることを正直に打ち明けながら、また主の励ましを受けて歩んでいきたいと願います。